

以下の文章を読み、「わかる」ということについて、あなたの考えを述べなさい。

ひさしぶりで会った友人が、開口一番言いました。「最近の生命科学研究はすごいわね。なんでも遺伝子でわかっちゃうんでしょ」。文科省の委員会でお会いした数学者の藤原正彦さんも「生命倫理の議論に参加する必要があるって生命科学の本を読んでみたらこんなにわかっているのかと思って恐ろしくなりましたよ」と言われました。ゲノム解析のスピードがあがり、自動化され、解析情報がどんどん蓄積するようになったここ数年は、遺伝子に関する情報の医療への活用をめざしたプロジェクトが次々と動き活発です。たいへんなことが起きているように見えるに違いありません。でも、ものごとは逆から見ることもできます。受精卵から体ができていく発生過程、脳のはたらきなど複雑な現象は言うに及ばず、一個の細胞のはたらきすらわからないことだらけです。ここでわかるとはどういうことかと考えます。たとえば乳がんの患者さんがあるがん遺伝子をもっている割合を調べると、10%であるというのが実態です。がん遺伝子の発見は重要ですし、そこからわかることはたくさんあります。けれども、これでがんという病気がわかったと言えるかというそうではありません。科学でいう「わかる」と日常使う「わかる」という言葉とのずれがここにあります。

生きもの、とくに人間に関わる研究の場合、このずれに気をつけることが大事であり、生命誌研究館※はこの間をつなぐことを意識して活動しています。

(中村桂子『ゲノムに書いてないこと』より)

※1993年に設立された企業博物館。生命科学に関連した展示と研究を行っている。